

註解

改正月令博物考

八月部





△敦賀祭 今

日一十

△司召 今

△和泉太鳥明神祭 今

日四十

△待宵 今

△豊後八幡祭 今

日四十

△中秋節 今

△名月 今

日三十

△良夜 今

△新正月 今

日三十

△良宵 今

△高月 今

日三十

△望月 今

△最中月 今

日三十

△望月 今

△月こども 今

日三十

△望月 今

△月餅 今

日三十

△望月 今

△名月餅 今

日三十

△望月 今

△放生會 今

日三十

△望月 今

△諸国八幡祭 今

日三十

△望月 今

△豊前門司祭 今

日三十

△望月 今

△都管太神祭 今

日三十

△望月 今

日四十一 日三十

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一 日三十

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

日四十一

△伊弉名祭 今	△長崎菩薩祭 今
△勢来名祭 今	△都西院祭 今
△筑前府祭 今	△秋社日 今
△前宰府祭 今	△秋社日 今
△後彼岸 今	△秋社日 今
△都死活杖祭 今	△死杖の祭 今
△釈奠 今	△碓氷 今
△衣打 今	△持衣 今
△落水 今	△毛見 今
△新結 今	△下りやま 今
△時令 今	△肌寒 今
△暴風 今	△長夜 今
△やゝ寒 今	△長夜 今
△草木 今	

此部ハ八月の草木と云ふ物

△十六夜月 今	△伏待 今
△引分の駒 今	△駒迎 今
△上野の駒 今	△武藏の駒 今
△徳坂の駒 今	
△豊前門司祭 今	
△鶴岡祭 今	
△宇佐祭 今	
△安の津祭 今	
△山城八幡祭 今	
△名月餅 今	
△月こども 今	
△最中月 今	
△高月 今	
△新正月 今	
△良夜 今	
△良宵 今	
△待宵 今	
△中秋節 今	
△豊後八幡祭 今	
△和泉太鳥明神祭 今	
△敦賀祭 今	



△草茸 △標茸 辛子 △猪茸  
△舞茸 △松茸 辛子 △蛇茸

○天狗草 △月夜草 辛子  
○野山椒 △松茸 辛子

△松露 辛子 △中稻 辛子

△粟根引 辛子 △貝割菜 辛子

△摘菜 辛子 △中核大根 辛子

△间引菜 辛子 △菜種蒔 辛子

△胡麻刈 辛子

**種植** △芥子蒔 辛子

△大根 辛子 △粟粟 辛子

**生類** この部は、八月一ヶ月乃  
生るゝとありむ

△燕 辛子 △稻肩鳥 辛子

△鶺鴒 △石たき △あやぎら  
△とろとろ △ささぎ △ささぎ

△朝鳥 △小鳥 △渡鳥 辛子  
△つとむる △ささぎ △ささぎ

△色鳥 辛子 △鴉 辛子

△山雀 辛子 △こがら 余渡鳥  
△まて

△平雀 辛子 △日雀 辛子

△猿子鳥 辛子 △照猿子 辛子

△頬赤鳥 辛子 △あぶら 辛子

△瑠璃鳥 辛子 △眼白鳥 辛子

△鶉 辛子 △島鶉 辛子

△鷓鴣 辛子 △翡翠 辛子

△連雀 辛子 △屋長鳥 練形  
△まて

△啄木鳥 辛子 △菊戴鳥 辛子

△掠鳥 辛子 △栗鷹 辛子

△鶺鴒 辛子

△志々 辛子 △蒿雀 辛子

△樞鳥 辛子 △額鳥 辛子



はるさ月 秘藏抄出 △まき月  
△くさ月 已上莫傳抄出 △秋月

△月見月 △紅染月 已上藏玉抄出  
△長月 詩九月小定心 △竹乃春 非八月又九月

**異名註** △桂月 桂の花開く  
時故名つく桂秋も同

△清秋 此頃空明 不清之故  
△仲高 秋乃中 といふ夏より

△壯月 八月辛と得 塞壯 亦雅  
△白露 節の名 註節の如ふあり

△南呂 律の名 註口の律の如く有  
△葉月 云 此頃木は葉色づき

落る故葉落月の畧也 清輔與後抄  
又云 八月のチ 字畧 た たり

又云 初来也 初て来 月故  
△長月 一夜初め たるた 覺

ゆり故之實 長 といふ 冬 といふ 夏  
の短くたり 對して た たり 知 火

也 季寄 八月 と あり あれ 九月 と  
△竹の春 此頃 暑さ去り 寒さ来ん

とくろ氣ひて至て涼く故小唐の  
俗竹の小春といふ 贊室 省譜出

此月竹さかんふるゆるゆへ名づ  
くとも つ たり さ 花さ月の く

ふる 教 ぐへ あ たり を ー

秘藏抄 こ ころ さ

初 の 声 ま ゆる り こ ころ さ の

胡乃 こ ころ さ の ま の ま の

全 木 深月

秘藏抄 こ ころ さ の ま の

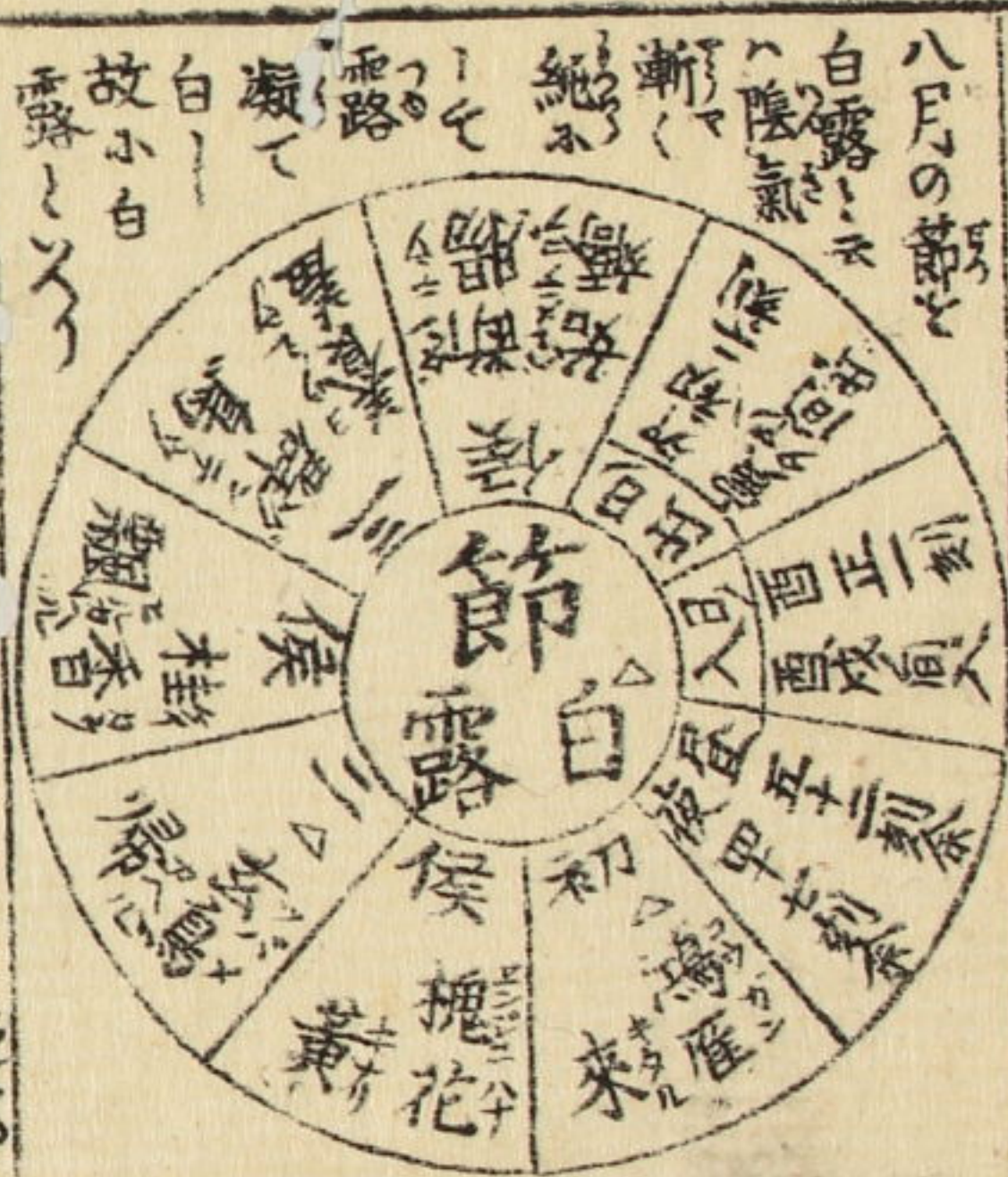
藏玉 こ ころ さ の ま の

秘藏抄 こ ころ さ の ま の

秘藏抄 こ ころ さ の ま の

白露

八月の節  
二候。日出入。昼夜長短記



八月の節

△鴻鳥寒と恐きて来り。槐の花さる△燕北頃北へかゝる

○桂の花さる香風ふむる

○諸鳥の養着るよる川食

物とキく冬入るのやいとする

○断腸の秋海棠の事人

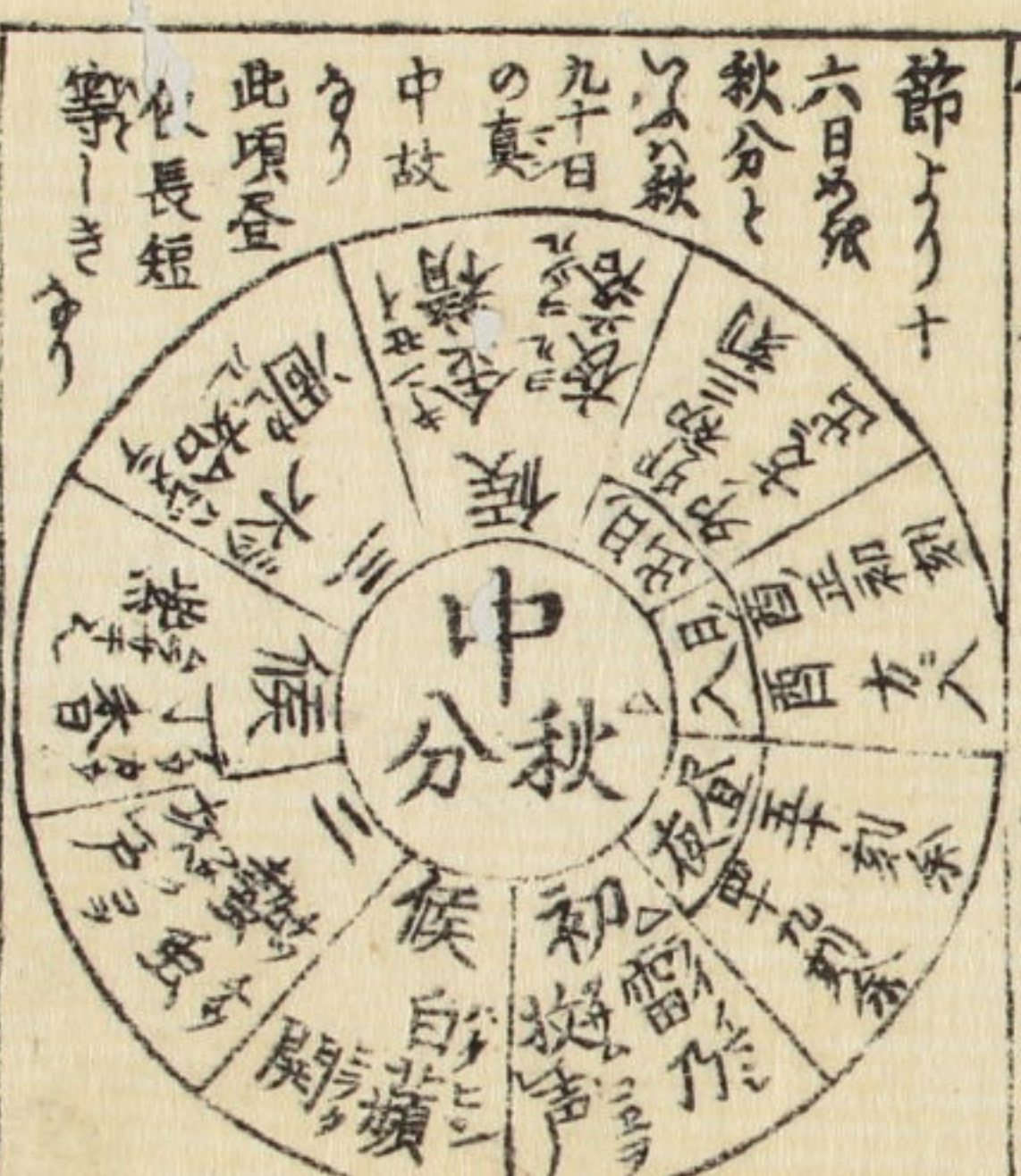
始て嬌の答とつる雁燕の

事ハ未女く生類の部は出と

節占候 今日晴天る稲作十分の実入り

日和はまきてく火小属る雨ふれを實つる風は

秋分 八月の中を七十二候。草木七十二候。日出入。昼夜長短記



此月より来二月まで雷声を収めて鳴らす。顔の浮草あり

○蟻虫坏戸の虫冬の寒気を

ふせがんとあつて穴をあかす

○丁香紫の花の咲とる

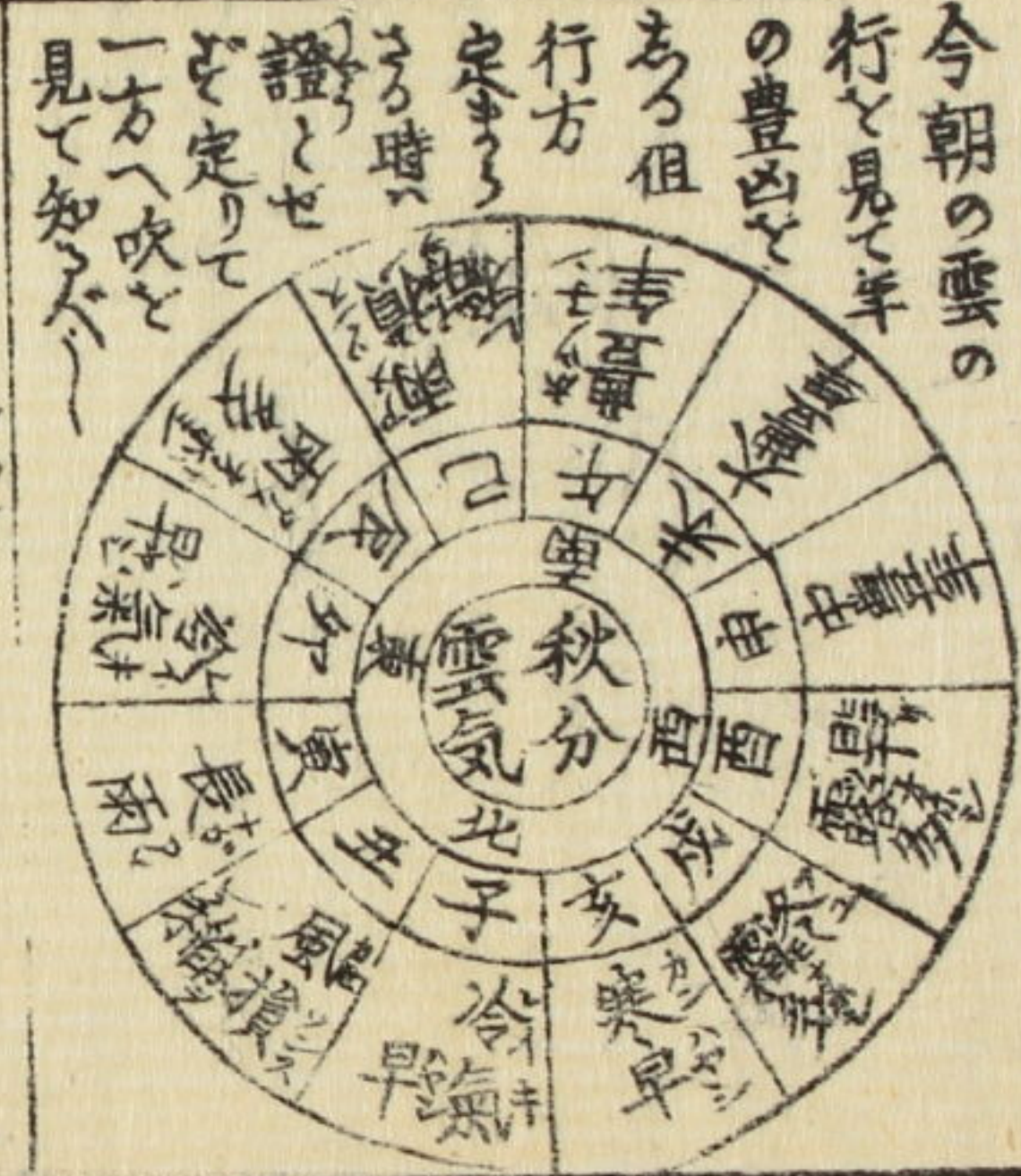
○水は是とて漸く潤るあり



○金精とつゞ星夜の中い西  
海ふつとあり落さぬくさる

秋分 天氣占候 今日晴天ふれい  
霜作よし曇り

いありし夕立よるれり然る  
とも冬いありて采の價貴き  
事もあり○西方ふ白雲有  
秋の収まり黒雲ハ来  
年早まり○秋分の節社  
日の前よれれ東年米豊



今朝の雲の  
行と見て年  
の豊凶と  
ある但  
行方  
定まり  
る時  
證とせ  
を定りて  
一方へ吹と  
見て知るべし

秋分禁忌 殺生とる事なれ  
刑と行ふことなれ

秋分祭 今先祖と祭  
二月春分の祭同

日令 八月日の定まりたる支  
の定まりたる此部あり

朔 ○いほの月まも朔日のいほ  
日 まるるれ其月中の日和

抵よりとつとも今日少し雨  
あれ此月中風雨順なりと  
いなり○晴天ふれい  
然るとも冬まも早しけり  
麥野菜いあり○又大風  
雨あれ麻ありて布の價  
來年貴し大豆小豆  
いもとるか手とる

朔 衣服の式 今日武家  
民もい冷氣

くろくも帷子と着麻上下と  
きし礼と勤むくしは上下の階

○小笠原家秘旨進退集曰五月  
五日より八月晦日まで帷子さう

八月の内ふ若寒き時ハ裕ても  
小袖ももかこびり下り

かさひあつて瓜はくまで  
とぬぐうとく判

朔 天中節 此日ハ凶悪の日  
故に昔ハ陰陽家

賤の門戸は賤とくし世務向き  
天中札とくし符と貴

これハ陰陽一家の説さり  
○五月五日の午時刻と天中

節とくし五月五日の異名  
とくしはかりし撮要録に出り

朔 八朔 △八朔の賀△田實の節  
△田圃の節△田圃の祝

△田の實ハ祝△憑祝△恃怙節句  
○此日たのめいへいもたのめ

儀式ともいひて家々たがひ小物  
と贈りあふ事ありし公事根源

ハ此事本説るし世俗の風儀  
也とありて後深草院の建長の

頃より始りてあつた田のそと  
米と折敷土器をいれ入きて人

のりくはけりけりし物とま  
るせり○日次記事ハ此祝ひ昔

ハある事あり中世はありて  
農民稻の初穂と今日禁中へ

奉りし事より起まりとあり  
○一説ハ田の実田の面をくかく

子と頼むとハ字ハ通りて人た  
かひたのまらむ心と物とれり

あハ事ありとあり○今世ハ武  
家が民も厚く祝ふ夏と冬

○唐土ハ今日勝とくす月令曠  
勝ハ新穀と初る祭の名其外

説ハ委り日本歳時記出せり  
○八朔や去来不富と福のハ由

八朔

八朔

狂 今朝之れは移るかの徳な  
れのものたのむ前をさるとん 文竹

朔 繪行器 本地にて行器乃  
小さらと造る目

出度繪とてかきたるく田の實  
又ハ菓豆のたぐひさぬくの物  
作はして互に相たのむの意  
淑とて今日おくるふるり京師

ハ今もそとあつらうハ朔前  
日ハ市中に繪行器と賣り  
ありく也真粉糕ふ角小豆と  
むらつとと粘てこれと藤乃

それと御所言葉のつくり  
是ととも急がふ入て贈る合  
非 絃乃急やよふ封箱の紋  
奏たひくはりまはるる歴文  
繪

朔 緑雀 造雑。造松虫  
銘々たもしくみ作はる繪  
不わいよそへて児女同士  
不わいよそへて児女同士

そあり又意改仁と枝を  
さうてもわくふくくたり  
非 かにる緑雀の細工人 魯文  
そそ枝仁いそは上の為徳を  
朔 御馬戯覽 今日東都  
馬士兼付の竹を鞭してこれ  
ひ来る古十五日駒迎の例や

朔 京 松尾神事相撲 東西  
がつ松京方 差我方と云  
往古ハ内裏相撲 節會の通  
て行るのれらう。ハ幡子ハその

社傳ありやんり  
神泉苑善女龍王祭

朔 八朔梅 是早梅の類  
堂上方の賀儀よ

取用いらる事も有る  
非 難波は々稚多うの秋の梅  
ハ朔や平塚秋と梅の花  
梅屋や竹のまふるの日記

梅屋や竹のまふるの日記

朔 妙術 眼明袋 今日百州の  
露と取りて紅結ふ

〇又方柏の露を取て洗ひてもし

〇七月晦日東ふ向ふ樹の枝と

とりて炭ふやそ今日其炭ふて

赤口白舌隨節滅しかき門  
押せ火難盗難病難口

舌等乃わさこひ張さふり

朔 和 三村祭 坂申斐町の東  
ふり開口明神

と云葉喜式出當地主日の名へ開口  
村木戸村原村の間へ故三ツの村

明神と云るり又大寺ととを  
あつゆふ俗は大寺祭とせ

つるり住吉明神乃外宮と  
称と祭りの朔日二日兩日あり

二 不成 〇今日白髪と扱ふは  
就日 〇交易又衣服と裁ふは

三 風雨あれい麻宜い布の  
價高し 〇晴天るれい冬早

米ふとら 〇今日日月影曇りて  
あざやう見えざれ二月雨多

〇今日の竈の神の生る日祭の  
十二月をれ今日竈と清くは福

三 和 泉 堀天神祭 戎町東ふり  
威徳山常樂寺

と号と昔の塩六村あり故の塩  
穴天神とも云六月十三日と夏神

祭と今日と秋祭と云神興え  
びと島へ渡御あるなり〇毎月

廿五日ふり連歌興行あり  
排戎ありは小社の搦らな李坂

四 〇今日將茶とさして勝る  
日者年の終まで福あり負

かる者い病ふかる故と今日と  
圍棋白福乃日とつり

四日 天壽の節 唐ふてい今日と  
天壽の節といふ

四日 京北野祭 祭神三座中の  
菅原相承り昔

祭五日よりしと永承元年  
より八月四日不定りり若茶抄出

此祭甚美麗なりと神輿下立  
賣の西御旅處へ渡御ありしと

社記小見へいれし今いふ  
○按じると應仁の頃より此祭

退轉して今い潮く氏子町より  
芋莖はて神輿と作り渡御のまね

びとあるすまてなり去り九月四  
日あり是と俗小芋莖祭といふ

哥 年中行司哥合 温堅

たのむまちうはうしてひまする  
此節のちあはれはさくらぐら

非 ことめあはれ月秋と水のあき移水

狂 いふいふころる場とばされ  
そことあはれとあさりなり 瓢流

五日 千秋節 今日唐玄宗帝降  
誕の日故名く後

改て天長節云今日王公に鑑て献  
士庶人に承露囊と云りのと相れ

○今日交易衣裁を忌むなり  
隋唐嘉話並揚万里か揮塵録出

五日 江白鬚社開帳 昔い今日  
開帳あり

元禄の頃より絶よりとと  
非 戸と字林のあはれ杖の毛 藤隅

七日 南 道祖神祭のさ祭  
都より後田彦命今神門町

八 今日竹醉日と云竹と植とい  
能まびる季の五月之五月十八日

十日 不成 今日小児の額朱にて点  
就目とととと瘡瘡癩疹と

あはれし諸病をのぞく  
とんと天灸といふ

十日 和 上石津祭神休蛭子の神  
泉 下石津い社有 此祭は正月

十日 越前敦賀祭 敦賀の古名角鹿より祭神

仲哀天皇より氣比社として神事二日より今日まで

とて賑いしく京師祇園の似たる山ざり等つらく有る

十一 来年の早秋水より占ふより今日朝早く起て水辺より

到り風波をたぬの水と一處よりかゝりて其水を見て知る其水

ひくやうに来年水多きと占ふより水溢るやうなるは来年早

十一 司召 秋の除目 京官除目 諸官入王臣國司の至りて才

徳の勝る由と奏して品々の爵禄と賜ふ日あり春の縣召

におさる二月より入柄とあるは死見しつゝとて命あつて

奏とて擬階の奏とて

此人々と多し出して爵禄と賜ふと定考しつゝあり

拾遺 貫之

非定考や宗て自然なる名は皆草也

狂飯も咽通らぬくもの司を

三十 和 大鳥明神祭の社 大鳥村の泉あり和泉の二宮祭の年の度

四十 待宵 小望月 十四夜月 毎月十五日望月

稱ふゆへ今日と小望月と云

〇十四日と待宵と云事 中頃の能備ふつひ出さう。和歌連歌

のほご云心とつづきも恋の歌

十四夜月とつづき 題して 道香卿

あふりけ今宵の月はるあふり  
明日のさあ中の影を満す

④連 明日の月もあふりけ今宵の月もあふり

月今宵あふりけ明日の光もあふり

月今宵あふりけ明日の光もあふり

月今宵あふりけ明日の光もあふり

月今宵あふりけ明日の光もあふり

月今宵あふりけ明日の光もあふり

月今宵あふりけ明日の光もあふり

詩 十四夜五字對句 同上

天意將圓夜 只爭一夕早

人心待滿時 恰作九分圓

詩 十四夜七字對句 詩變

今夕試見先與約 未望夜

來宵定賞莫相違 鏡久圓

詩 十四夜月詞 白居易

光彩遍空輪欲滿 光ニチカテ形

詩 全 白皚

二七秋容月色奇 獨擎吟筆

飲芳卮 詩ヲ作ラシト筆ヲ取又酒ヲ飲

十豐 ○八幡祭 府内小あり今日

後放生會行り魚海中放

事 甚賑り是て府内濱の市云

十五 今夕月曇れ八方の事ありし

今日雨ふれ来年正月元日の

天氣 又来年水多し○月曇

多し 蟬胎む事あり又蕎麥

実あり○月あふりけ今宵の月

多く魚とくまゝとくまゝ

十五 中秋節 秋九十日は最中

ゆへ名づく又ハ

月の異名とくともく。唐にも今宵と中秋の夜といひて月と賞とる事。李唐の世とて盛景として詩人文人詠多し。野庭に出

十五 名月 良夜 良月 端月 正月 三五夜 樂天詩

△新月 △名高月 △今宵月 △望月 △最中月 △月見

△月こよひ △今日月 △明形 △半名月 故事 十五夜

○日本十五夜の月と賞とるこころ。孝元天皇の御時より初より舊本長

明四季物語の出より又今宵の月をあらく詠とる哥ハ天曆の御製

あり月の名。漢ひて唐の玄宗貴妃と大液池のぞとて月と

詠ひなすひ事又羅公遠此夜玄宗小侍とて月と詠ひさる

事關元遺事連史等に見る次又故吏あり。○名月の事説多し委

一日本歳時記出と ○望月の満月なり。三ムヌモ相

通ドてモトモト同音なれは又月の出る時入日と向ひ望む

ゆへ望月といふ毎月月と日と相のぞえとてをち月とい

へい連誹ハ今日の子とす ○端正月といふ端しく正圓月

なれハ斯く事文類聚に出 ○新月誹諧の季ハ三秋とて

とて各あり。○詩奇の説ハ違つる委しく三秋の部十二丁目

名月 霓裳羽衣曲 羅公遠ト云フ

者十五夜玄宗ノカタハラニ在テ月ヲ詠フ杖ヲ取テ空ニ投

ケレハ化シテ橋トナル其色銀ノコトシ帝ト共ニ此橋ヲ登リ終

ニ月宮ニ至ル仙女數百人アリテ歌舞ス帝問コレ何ノ曲



ナルヤ 荅ヘテ云ク 霓裳羽衣  
曲ナリ 玄宗コレヲヒソカニシ  
ルニ又橋ヲクダルニ歩ニ隨  
ヒテ橋ハ次第ニ滅シケリ

其後伶人ドモヲ召シテコノ  
曲ヲ制表ス 事文類聚ニ出

月餅 十五日唐土燕都ノ人サ  
ニクノ餅ヲ作り名ト形

ヲ思ヒクニ好ニテ人ニ送ルナリ  
是ヲ看月會ト云 廣義ニ出

○又麩粉ニテ作りヤキテ大中小  
段々ニタニカサ子テ上ニ五色ノカ

リヲ置キ桂ノ花ヲサシハサニテ  
月ニ供ストイヘリ 舜水談綺ニ出

○本朝ノ團粹モコレニナラヒタル  
モノカ辛ヲ食フハ諸國ニ普子

ケレトモ 東都ノ俗ハコノ日  
給ヲ食フナリ

狗寶 狗中秋ノ月ヲ望テ戯  
寶ヲ吐クト團ノゴトニ

即チ其寶ヲモテアソビ復コレ  
ヲ飲ナリ 農夫コレヲ知りテ月

下ニ光リアルトコロヲウカシテ  
コレヲ取ルトイヘリ

續古今 天曆の御製  
月ノ光ル月きれとこの月乃

とぞいれ月ふ似る月とれき  
詞花 聆リヨリ合テ 藤朝信朝臣

列約の氣とさくへてあふ坂の  
せき海とくくを月ハ出る

拾遺愚草 定家  
明ハ又秋の光ハもさぬた

かこみく月のけきのこころハ  
金葉集 仲正

めくノ来ニ秋の半ニまじりて  
月のこころを看みまじり

全 公實  
秋の夜はさかほつとさかほつ

まよひの月乃若くをけり  
栞玉 十五夜待月

月もろくいく夕の今言へば  
かしてまじりし重のまじりぬ

詞 ころもろく月こひひこひは月  
とれまじり若はあふ月名はあふ

ころの夜の月こひひこひは月こよ  
ひをまじりから月のまじりは月

ひまふなふの秋をふまふふ月  
○秋よ月四季戀物まじりて

うのあふするまじりこひひは月  
賞歌のまじりむむむ物まじり

時をまじりまじり合ふまじり  
連 ころもろく月こひひこひは月

まじり秋の月こひひこひは月  
月の秋のまじり二夜乃を言ふ

月こひひこひは月こひひは月  
非 ころもろく月こひひこひは月

名月や此とまじりてまじりまじり  
名月や此とまじりの上は秋の秋其角

こよふまじりまじりまじり乃月越へ  
尾ふくまじりまじりまじり乃月野水

名月の確小峰まじりまじりまじり  
まじり月や平名院のまじりまじり

雲のまじりまじりまじり乃月大石  
名月やまじりてまじりまじり乃月

名月や月お置まじりまじりまじり  
名月や酒まじりまじりまじり乃月

狂 女まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじりまじり

名月やまじりまじりまじり乃月や  
名月のまじりまじりまじり乃月

まじりまじりまじりまじり乃月  
まじりまじりまじりまじり乃月

名月やまじりまじり乃月今言へば  
まじりまじり乃月のまじり乃月

名月 八月小閏のありし  
まじり乃十五夜

連 今言へばまじりまじり乃月  
非 今言へばまじり乃月のまじり乃月

名月蝕 奇 乃月乃月乃月  
まじり乃月乃月乃月乃月

乃月乃月乃月乃月乃月乃月  
乃月乃月乃月乃月乃月乃月

乃月乃月乃月乃月乃月乃月  
乃月乃月乃月乃月乃月乃月

名月暈 〇月の暈其外名月の事博物志の

の部は季一を出し

非 金にてる塵を此月の月天

狂 天上下今有月之ニツの

名月曇 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月雨 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月暈 〇月の暈其外名月の事博物志の

の部は季一を出し

非 金にてる塵を此月の月天

狂 天上下今有月之ニツの

名月曇 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月雨 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月暈 〇月の暈其外名月の事博物志の

の部は季一を出し

非 金にてる塵を此月の月天

狂 天上下今有月之ニツの

名月曇 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月雨 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月暈 〇月の暈其外名月の事博物志の

の部は季一を出し

非 金にてる塵を此月の月天

狂 天上下今有月之ニツの

名月曇 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月雨 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月暈 〇月の暈其外名月の事博物志の

の部は季一を出し

非 金にてる塵を此月の月天

狂 天上下今有月之ニツの

名月曇 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月雨 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月暈 〇月の暈其外名月の事博物志の

の部は季一を出し

非 金にてる塵を此月の月天

狂 天上下今有月之ニツの

名月曇 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

名月雨 雨をて晴やん

非 詠香の花もへく月を能鬼

狂 天をれをそく白をけ於来

詩 一年逢好夜 萬里見有時 張佖

一年ノ中テ面白夜ニ逢テ萬里ノ外ニテ月見ラスル時ハ今宵ジヤ

詩 三秋端正月 今夜出東溟 韓愈

タシクミンルイ月ガ東ノハテノ海ヨリ出ブルナリ

詩 高秋渾似水 萬里正圓明 靈原夫人

秋フカクナレバ山モ川モスベテ水ノシミワタリタルヤウナケレキデ萬

里ノアナタニテ月ガ一メンニアキラカニテ一トカナルヨシナリ

詩 三五夜中新月色 白樂天

十五夜ノ月ガウツタニサカナヤウニミエル

詩 名月之詞 唐 僧 康白

尋常三五夜 豈是不婵娟 十五ヤノ月モアサヤカニウルハレクナイ

及至中秋半 還勝別夜圓 月ノト五夜トレバ一タ外ノ清光

凝有露 皓色爽無烟 光リ

自古人皆望 年來復一季

詩 名月之詞 唐 王達

中庭地白樹棲鴉 冷露無聲

濕桂花 庭ニハ月ノカゲ白ク木ニハ

月明人尽望 不知秋思在誰家

今ヨイノ月ハ世上ノ人皆見テ賞スニ方其中ニ實ニコノ秋ノ情ヲヨクシリタ

狀 月見之文 尺牘漢文ナリ

良夜之清光萬里同  
賞如公得閑請共遊  
廣池行厨按排已具  
馬速許駕

尺牘 啓替并王解  
良夜仲秋。此夜晴光  
召為。嶺

潔萬里 万卿。万國同賞  
上

稱數中 縱目行厨  
上 淺酌

中鹿饌。淡飯按排  
上 設不

勞公中 悉余相計  
許駕上 仰

望伏侍中 相許然諾  
オイラマ入。セコヤウチ下サレ

狀 名月文返事  
新命一輪之明輝王賞  
記

得高筵會詩客閑地吟行尤  
一大勝事應招趨拜以謝  
尺牘 上中下各替ヲ記ス

承命 上 辱答中 指示一輪

明輝 万里素影。秋月佳名賞

詠 絕比倫。勝函賞。何如記

得高筵 上 聞說瓊席張雅

宴中 群友呼來為宴會 閑

池吟行 池上遊 翫 一大勝事

詩人博物。興趣。逸興

應招 上 一諾應命 趨拜

御三在 御三在

上 疾至不辭 中 來謁 中 不

超時 中 倒履走謝

放生會 △放生川△のり

皇の御宇養老四年小征夷

禁庭より宇佐八幡宮へ

其後八幡の託宣ありて此

祭礼記に出たりありて

為秀 年中行司

新撰六帖 知家

勇山社のくまやまのくま

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

放生會のころは

中頃兵乱より退轉ありしを  
延宝七年御再興ありしを

十諸國八幡祭 ○京都よこいの  
御所、若宮

○等持院、廣沢のてら、三枝の山  
崎、門出 ○大坂ふてい、三ッ八

幡祭 ○江戸、こいの深草  
關年せ介 ○法谷、西くは

志賀八幡祭 近江、鶴岡祭 鎌倉  
△譽田祭 河及、八月、神事あり十四日、  
の刻より、奥院、渡御あり

△宇佐祭 豊前、國、八月十五日祭礼  
の事、當社、始りしにへり

△安濃津祭 伊勢國、昔、小社、寛永九  
年、造営あり、今、いまだ

△豊浦祭 長門、國、豊浦郡、のり祭、八九  
月十五日、昔、八月、ありしにや

△箱崎祭 筑前、國、豊前、司祭、大祭、其、  
外、多、傳、物

十播野口念佛 孝謙天皇  
の御宇、教  
信と云僧、加古川、庵して念  
佛と常、不、旅、人の荷を負ひ

みどて、つた、た、く、貞觀八年、八  
月十五日、盜賊の、あ、ふ、首、と、切ら  
る、其、庵、の、跡、い、寺、と、建、教、信、寺、と  
号す、今日、僧、徒、集りて、佛、事、と、す、号

十六 駒迎 △駒牽 △引分の使  
△望月の駒 △ころ原の駒

△上野駒 △武藏駒 △まを、け、駒  
△穗坂駒 ○昔、ハ、諸國、の、牧、より

牧、と、馬、と、養、  
野、の、事、を、禁、中、へ、馬、と、奉、る、今  
日、信、濃、勅、旨、の、牧、より、六十、足

逢坂山、と、引、來、る、右、馬、寮  
左、馬、寮、の、官、人、請、取、て、禁、庭

へ、奉、る、あり、天皇、南、殿、出、御  
あり、て、御、馬、を、御、覽、し、公卿

已、下、次、弟、の、御、馬、と、給、り、り、尚  
又、次、將、と、り、り、て、院、の、御、所、東、宮

へ、も、ま、り、せ、ま、此、勅、使、と、  
分の、使、と、り、り、元、ハ、十五、日、ふ、有

去、る、と、も、朱、萐、院、の、御、國、忌、り  
當、る、少、く、十六、日、ふ、あり、たり

八月 日令

八月 日令

八月 日令

哥 續後撰

雅具

あふ坂の雲さくら歩終るは  
今宵そ秋の月ら月の約

拾遺 ころゑの約 馬遠

あふ坂の園の家南ふく  
あふらあふらさうさうの約

詞 いききの約△引さけれ約○宮  
人のあてむらる

ちの約○雲の下たつてさう○ふま  
らる○お坂の杖ふるふゆり○よら

むらる○引金やまむ○おひや  
かてくふ引さる○歌んゆり○立出

○かけもるさう○ひさたのな  
○かけもるさう

非 約兼や尾てたがは月とさ  
約のよや佛前の養は是非りは

字ぬきかてはまよ約の約途○宗因  
約途○と学てく公家のなを

狂 香坂の雲の雲かきさう  
腰や引らんらも月きの約

十六夜月

△宵不知○餅よハ  
今日の季と寸哥

小 説多一三秋の十三丁目小出と

詞 さひさききのふのそ○みか光り  
そふ○さよよひのを朝○山の隈

みさよふ秋○志りしぎよふ○  
きのふれもれぬ教

非 月夜やうの海老松まう松雨  
ささふや泉をひはふ風と揚関山

かきよひやま約のそととては木奴  
千と秋の月のむれわらうか正秀

在 酒客であまかそあれさう  
ささふさうさうさうさう鳥兆

せりかひささしを張る名つけん  
いさよひさうさうさうさうは直徳

△立待△居待△伏待△更待  
右八月の季不出てる昏もあ

又三秋よわらうとつる季の昏も  
あり委一く三秋の三丁目不出と

八目 八五二



六十日 京 菅太神祭 菅家御所の旧趾也西

洞院五条坊門の南に在菅神降誕の地あり紅梅殿は是ふいひ

て五条坊門の北にあり猶今絶て小社と存して其跡のより神輿

渡御のより劍針五本より菅原の徳のよりけりい本夜

七十日 仍圓月 今夕の月を名づくるあり杜詩は出づ

伊 三嶋神事 当社神祭年分七十五度の内今日其一あり

八十日 不成 龍王會 今日四海就日の竜王會とる日あり

八十日 京 御霊祭 上の御霊は京極通筋違橋の

わたりけり下の御霊は京極通大炊御門北東にあり上の御霊同神に御霊と崇道天皇伊豫親王藤原夫人橋逸勢文屋宮

勅して元文帝をせしむといひてひたりてまろくふとて

○沖の御霊は上の御霊のや藤原之桂の御霊祭今日相撲あり

八十日 南 西大寺光明會 今日都北四日送へ八幡太郎義家は心

八十日 伊 業名祭 春日大明神を祭るる前日社の

前通南北に大車一輛あり夜ふ入挑灯はびびり當日車を南北へいそぐそり音

九十日 今日白髪と撥くははの交易又ハ衣服と裁とせむひあり

八十日 安居天神 河 上原八幡祭 上芝原祭 内原西園山村在

八十日 南 韓國祭社は高間町の南 南韓國町ふあり韓神の祭

一北日 都

廿二日 今日本浴よ 京○太秦聖徳 都太子會式

廿二日 長寄菩薩祭 唐の舟玉神 唐の姪嬭神

とく長崎は唐人の寺四ヶ寺あり此寺々々今日菩薩祭あり僧徒唐裝束にて修行せ唐人參詣して黒く棒とつ

廿四日 京○木匠明神祭 吉田山二 都○神輿一基あり

廿四日 江○龜戸天神祭隔年二行つ子寅辰午申戌三寛永三

年太宰府二勸請は奉る○六月廿四日夏越の抜浅草川二て修行を筑前宰府祭 祭神二天神二敬公二延喜元

年筑前太宰府二左遷二同三年覺御歳五十九二委二く博物堂二出を

廿五日 今日本枸杞二湯浴一してよ○今日と天倉二開二云薬と煉二てよ一又二丸薬等一を二ま二ら二し二て一功二能二お二ほ一

○今日白髪二よ二め二の二み二ど一の二い二と二い二と一

廿六日 南極老人星の降る日あり祈禱善事を二修二ら二ば一

南極星二人の壽命二と司二る星一ゆ二へ二今日と壽星現二く一

廿六日 京○崇徳院御忌 崇徳天皇の御事二あり今日京安井二で行一

廿七日 佛會。此日諸佛菩薩東海二の二の二より一故二名二づく一

和○織通明神祭二中二通二社一長瀬村二在二開二化一天皇御宇二祭始一

廿八日 不成京西院祭 産土神二八二春一日二社二と祭一

ま二り二神輿二二基一一基二住吉明神二と二同二村一住吉社二と祭一

九光 今日の萬物陰氣を感ず夜に分香とたじ〇今日水陸も

不吉の日あり遠方の旅行  
又舟は乗る事と忌むべし

**月令** 此部は八月日の定ま  
らざる一月の事と出さ

**彼岸** 當月の節より十五日  
前季の二月

又秋季と結ひて秋のひえとす  
**俳** 仲ひきは岩まままふふ連二

〇京東山 灵山念佛おとす  
又空也堂いもありさり

〇大坂天王寺春の彼岸と  
同トく教誨人おほし

**秋社日** 秋社といふ秋分前  
後はあらいの日は社日と

注し 春二月の歳小を女に記と  
〇秋社日雨られば来年豊年なり

京都死活杖祭 〇死杖の祭とも  
〇禰速の社とも

三條猪の熊は在古刑部省にあり  
此辺はあり刑死人の為に社と立

祭とあらす中世に千本引接寺  
並に壬生地藏は春に念佛

會ありこれとあらり死刑人  
の追善ありとしり

**釋奠** 上丁日ありとすて二月は  
二月は新葉 妙覺寺内大臣

唐人のむられ新とうつまて  
あらけいる一移の夜の月

**礎** 〇擣衣〇卷〇とし号〇  
夏の衣板とし畧語あり

東雅は和名抄と引て礎はキ又  
イタ擣衣石あり字又礎は作る

擣衣拵ははらちキ又イタハ衣  
板あり即今云キ又タと見

そらり今は木盤と用意とも昔  
ハ石礎あり故字も石扁ふるり

女工の具の専用なり物と上つ  
〇の嫁査ふも礎とと七夏あり

東宮舊事小曰太子納妃有石

碇一枚とある燈籠あり今の木

かて製する持盤の後世木綿を

專着用とす小至て石と木かひて

盤にて給子紗綾統等かつやと付小用

衣打 何きも衣打指子あり

衣打 何きも衣打指子あり

歌ふも玉もゆふ衣をうら松鏡類

夫木 名如搦衣 家長

詞抄衣まきり。打とまむ。くち

は芳。月澄む宿。月よこ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

た。月小う。みそ。月。うつ

詩 砧五字對句 同上

星河秋一雁 傳音暗斷結

砧杵夜千家 鳴杵自丁當

詩 砧七字對句 詩變

四野山河通遠色 遠村砧

千家砧杵勵秋聲 夜雨中

詩 砧之詞 王昌齡

長信宮中秋月明 昭陽殿下

衣聲 長信宮ハ漢ノ成帝ノ母ノ

堂中細草迹 紅羅帳裏不

堪情 白露ハ堂ノ中ニ生タル小

夕ヘカヌルヨシナリ

毛見 毛とつゝいへての草

是ナリ。博物志曰石ノ骨ニ

川ハ脉ナリ草木ハ毛ナリ土ハ

肉ナリ故ニ毛見トイフ

非 毛見海に移して十月終

落水 稲ノ実入る田ノ入

非 魚の身重くなりて河下

下藻 魚の身重くなりて河下

哥 夫木 名砂の川に下りや

非 下藻抄の跡を新座りま考

**新結** 今年の新糸ひて織る  
結と武州野州上州より出る

**時令** 此部より八月十月の  
時候より夏と記す

**暴風** △野分。八月ふ吹く大風  
のされとつら草木と吹

さるゆへといはけさより又山  
下より出る風とつら 和名抄出

哥 源氏物語

風さつた村もほろよゆへも  
さすくろちなくあはれぬる

新後拾遺

家隆

つらさす庵きとそまひとれ  
せかたはくぬ小のよれぬ

夫木

後京極

きのふもよりのねまじさのそ  
せかたはくろく園のへりさ

詞 吹さるる。せかたの。せかたの  
新集。あつ垣ぬ。あつきせか

。あまの風。せかたよましく。

連 吹さるる。せかたの。せかたの

非 秋菴の。せかたの。せかたの

狂 白糸と風のりもたの。せかたの

肌寒 △夜寒 △坐寒 △漸寒  
△朝寒 △そらさむ

物ふれて寒き。せかたの。せかたの

哥 新古今

基俊

燐風の。せかたの。せかたの

那 子らるる。せかたの。せかたの

潮字や石の。せかたの。せかたの

**長夜** 夜の至りて長き。せかたの

季とす。せかたの。せかたの

みらるる。此月。せかたの。せかたの

ゆら故。せかたの。せかたの

月小渡。せかたの。せかたの

詩 遅々。鐘漏。初長夜。歌々  
星河。歌。曙。天。トモ見エタリ



のこ紅葉のこゝの後の事

奇素をいふ家の名ふふふは

非素物(ゆ)の思(こ)の思(こ)

敗荷 △荷衣。蓮の葉は秋

荷衣の葉と衣と見(ま)たなるこ

非破葉のこぬと笑(わ)ふて去(い)る

狂 白身とまどと咳(せき)と月(つき)も

詩 敗荷詞 東坡

紅錦機空水國窮 轉頭千蓋

偃秋風 夏(なつ)ハニキヲオルハタノ如ク九

枯事都在沙鷗冷眼中 蓮

花ノサカリニハ其アタリニアソブオビリ  
モ一時ノエイジハラキハダレカドモソレモ  
今ヤブ蓮トフトロメハ登(のぼ)モホイナク思(おも)フベシ  
盛衰ハヨシ自(みづか)ニ見(ま)テ井(い)ルカモノノ眼(まなこ)ノ中(なか)ニアルトビヤ

新薑艸 形(かたち)とまき 似(に)て  
秋穂(あきほ)とます

俗(よ)ニ川(が)安(やす)トイフ人(ひと)和名(わな)カサノ。色(いろ)の  
異(こと)名(な) 黄(わ)艸(し)。菘(す)竹(たけ)。蕨(わづ)艸(し)

本朝(ほんて)深(こ)色(いろ)家(いへ)ニ用(もち)ゆ物(もの)と染(ぞ)れハ  
黄色(きいろ)なる。唐(たう)ノ形(かたち)違(ちが)ハ竹(たけ)

似(に)て細(こ)くうす。莖(かき)丸(まる)く煮(ゆ)て  
漆物(しやくぶつ)トシ本(ほん)艸(し)ト出(い)出(で)る。唐(たう)ノ竹(たけ)ノ類(るい)

非福祥(ひふくさう) けりけりまけり(の)色(いろ) 秀石(しゅうせき)

名木散 能(よ)借(か)李(り)寄(よ)ニ昔(むかし)より  
出(い)で分(わ)かりしに近世(きんせい)の

説(せつ)ニ捺搦(なつ)林(りん)ノ類(るい)此(こ)頃(ころ)紅(べに)葉(は)トシ  
散(さん)りノ惣名(そうな)とシテ尤(なほ)左(ひだり)も有(あ)り

冬(ふゆ)ノ季(き)子(こ)ハ出(い)で名(な)草(くさ)枯(か)こも同意(どうい)

非(ひ) 十日(じふにち)目(め)の角(かく)カハ果(は)や名(な)ハ木(き)ハ山(やま)  
牡丹根分(ぼたんこんぶん) 夏(なつ)川(が)の地(ち)とシテ乾(かわ)





細く砂と交ぜよく篩ひ八九月  
紅く芽と出せし後この土に  
接し栽べし糞溺と用ゆるは  
よくかきん冬油渣とこれに

根のかかりか置へ

非根とてか家のまきぬる中  
狂果被るいぼてゆすうけふの  
取それ根とらるるそよた

木芙蓉

芙蓉とてりくもいふ  
木蓮 白氏文集の拒霜

事物異名華木 本州 和名 木らす  
八九月初て開く故拒霜の名あり

○本州李時珍が説ふは芙蓉と  
いふ荷花のこゝに偶此一物荷花と

相似るとして木芙蓉と号くと  
云後世二物一名と混ぜりゆ

故終る荷花と水芙蓉といふ  
此月の瓜木芙蓉といふ

俳 ぬらうらふまよふ芙蓉  
木蓮や花を咲けり秋もあり嵐雪

木犀花

異名 岩桂 木樨  
○花桂 七里香 本

艸家の説の木犀へ岩桂といふ  
本艸尤然りせんは桂の種

類多したけくさたけがと  
此の白花は香気甚高し

桂花

是とての桂のこゝを  
いふ一種の岩桂とて

木犀といふ一種の菌桂ふて葉は  
三とらの文あり其花黄きり又

白きあり但し加茂祭りに用  
ゆる桂の花三四月とて是かあり

ら守享保中南京種渡りて所々  
小移り葉の筋末まで通る是

上品なり肉桂桂枝桂心官桂此  
木より出さるりこれとも日本心

くよと桂樹へありたる中世  
の人けあらざる

つゆの雪は誰か植て之をこの  
月にあるてあつてあつて光後

詞 月のうららかに柱と折。柱の花  
○つれづれにさるるうららかに

俳 白ひさふふ酒にほれは花  
夕のさるる葦酒にほれは花

狂 只ひうらむありうらむの  
傍もせしは木樨の花 実明

詩 凝露堂木樨 楊遲秀

夢 騎白鳳上青空 徑度銀河

入 日宮 ヲメニ鳳 登ニフリテ天ニホリ

コ 二身在廣寒 香世界 覺來

簾 外木樨風 身ハ廣寒トイフカウ

思ヒニガ夢カサメタレバスターノ外ノ木

犀ノ風ニニホフノデアリシナリ

縷紅 葉細密して杉  
藻のじし 浅青色

檀特花 一名西蕃蓮の葉  
ハ芭蕉ニ似て三  
四尺ニ過ると冬枯て春生ず  
七八月莖とめらんで花と

ひくく赤くして穂の  
實とりのて念珠と寸意

政 仁に似たり  
能 かくおのほりほや極む

金剛草 一名狼牙の其葉  
獸の牙のごとく

花の後 小豆の莢のぶくりに  
しそ中実あり根甚とつよ

能 約つるくもはし約つる乙由

白粉花 夕錦此花駿州  
野徑一面小

満ち咲き春苗と生し冬ハ  
枯る葉雞頭のくく花丁子

小似り大抵赤し其外様々  
あり実ハ白粉あり夕ニ開き

朝 ちむむ高サ二三尺とあり  
能 けりもかいらる小実なる葉

狂 志亦なると月夜の中戸に  
とさる遠く花のわらわい 不

**花紫** 紫艸の夏より。若紫の春より。花紫の

秋より。御傘に出。又若紫の春に

花の秋に。連哥産衣に出。其外

能合小紫艸と花紫といひて

秋。若紫といひて春とす然

れども今世間より紫の花の

二月より八月よりあり。す

四五月は咲き。○雑談抄にも

紫艸と春秋二度は用ゆ。こと

決然しが。たゞや若紫の春月

の嫩苗こそとす。

○古今抄の「くさくさ」の

くさくさいは。くさくさいとす。

**烏頭** 葉艾に似て厚く。花の

色紫に。形鳥塊に

似たり。因て名づく。菜物は烏

頭とい根なり。

**草烏頭** 花葉象

大抵川鳥

頭は類と葉力あり。して

盡力あり。和州金剛山及

所より出。○柳花者流

のさうり。さうり。さうりの別

この艸烏頭なり。

○花咲の味も。さうり。さうり。

**刈萱** 雀麥。葉毎五葉

莖相對して生。花の

胡蘿蔔。又ハ景天草の。ト

初青く後黄なり。女郎花に

似て枝葉たぐさる。のこへ。或

説は刈萱の芒の類なり。

**紫苑** 一名。紫菀。還魂草

物の名。よして此。こへ。

○古今抄。ふり。ふり。ふり。

こへ。こへ。こへ。こへ。

○俊頼の抄。親の塚。ようへ

る。故事あり。物。さうり。こへ

ふり。さうり。即ち鬼の。こへ

る。

草よりゆへ鬼のまき草又志と  
ふもつとつたつた万葉と  
是のまきのうら 對するゆへ  
かくあわて名づちたる此  
大は論あり 補遺に出す

謡曲大江山は紫苑とつたあふ  
やんねふのまきとつたは誰  
がつちとつた名やるとつたあ

⑤ 非 夢のつたは花の夜あき

⑥ 月草 鴨跖草の花と碧  
蟬花と云の俗は露艸

⑦ 青花と云の夜月の影は  
くつちとつた久しとつた咲くゆへ

⑧ 百夜草と云の花の汁と紙  
はうら 漆具と守故とつた花

⑨ もつちて近江国は專らとつた  
女の職と守昔此花とつた衣とす

⑩ つら月とつたの花とつた衣色の  
移りやとつた恋奇を多くとつた

万葉はつたつたつたつたつたつた  
わさつたのほつたつたつたつた

⑪ 非 手松のつたつたつたつたつた  
月若や夜あきつたつたつた

宇治花園

宇治の應神天皇  
の離宮ありと

⑫ 后は太子の御坐しかりて  
原日御宮と申す時の御園

あり是と免道雅郎子と申  
奉るなり花園は多とつた中は教と

⑬ 専らとつたつたつたつたつた  
⑭ 哥 新勅撰 慈鎮

⑮ 昔つたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつた

⑯ 此哥はつたつたつたつたつた  
糸切齒等と宇治の関白の花

⑰ 園はつたつたつたつたつた  
花園とつたつたつたつたつた

⑱ 鎮和尚のつたつたつたつた  
若年とつたつたつたつた

俳花室の着衣と為る葉の著  
るる園を自ら懐く細代も自初

滋賀花園 近江大津よ  
あり天智天

皇乃御そのく旧跡ありとて  
新後拾遺 為遠

今も猶けり堂のまこととて  
名のとよりけり志りの花室

薄穂 尾花△花薄△初尾  
花△幡薄△皆日物  
△名あり

七八月長き莖と抽穂と  
あり是即ち花より形骸乃

尾小似たり故小尾花といふ  
古今 平貞文

夫木 人磨  
あふりかへふふり花より  
あふりかへふふり花より

玉葉 原薄 入道前大政大臣

秋ふの林麓けりけり  
あふりかへふふり花より

詞まひく。たひく。秋風。尾花  
波より。袂。袖。尾花より

井あり。波より。あふりかへふふり花より  
尾花より。あふりかへふふり花より

とくき。花より。あふりかへふふり花より  
見合すべし

俳和尾花風然して見えたり東巴  
まろひふりかへふふり花より

狂招きよせてむらさきをや秋のよ  
ふりかへふふり花より

薄と厚の薄 〇まほほの薄  
〇まほほの薄

夫木集は三種の薄ありとて  
鴨長明とみたり哥あり尤も記す

哥日公珍くいふま守をひたは  
たりかへふふり花より

白妙のま守ほの糸とくりき  
あふりかへふふり花より

あふりかへふふり花より  
あふりかへふふり花より

あふりかへふふり花より  
あふりかへふふり花より

あふりかへふふり花より  
あふりかへふふり花より

花すく月の方にはふりま  
ふりまをわのまは深き西行

○此三首の奇にて考ふべし一首  
ハ増穂あり一首ハ白く入る色

白く入り一首ハ蘗芳色なり  
又十寸穂と云て尺は満穂と

もつる説をありとて中  
壘より右の奇のつく

出るといふく臆説あり信  
用する不足らずといふ

根地草 河原ふ多くあり初  
葉五葉莖葉とも黄緑枝

の末この花あり八月あり

穀精草 又こいつとも云一名  
竹筒草。鼓植草

○春より生ざるとも花出  
ざれに分るく八月太鼓

のぶられざれば花とひく  
葉ハ細長

○星茶や梅んと溝の天の川  
草茶や梅と一度花ハさを善

穂とあり塩漬く貯ふ  
○此種の花美しはの名茶

黄蜀葵 菜ハは  
ハ似たり

○花黄色綿小似て大ひき  
○此種は何事ともく精神

烟草花 (一名) 烟花。はむこの  
ハ世入るく知るあり

○あるはむ浦をぬも烟草  
人のまゝおのふくもふん

藍花 花赤くして見ふ小  
藍汁ハ葉より

五六月小刈る物ゆ多く花  
と見るとはななく種とる

為は残せり物ふ甚くは  
一くこのまふて藍の花

○

蓼花

△蓼の穂。又穂蓼共  
いふ紅白数品あり

○大蓼。毛蓼。大蓼。四季も  
花のあり物あり 枝葉少し

うさぎ味の膳より 大蓼。五六尺  
小支のび幹も太き者。小支の蓼

し毛蓼。大蓼の節。毎毛あり

詩 万葉集

我宿の穂とそお絆つとてや

こふありまをいふとていゆらん

狂 蓼はか合ふ虫をてつられん  
知とく御ふたやされり 德音

蕎麥花

とてて穂云ハ  
斯のてて 箱の内

の角とていふなり世に紋如の角切  
角とていふ物の穂折敷といふ物

とて云も実の三穂ありといふ名  
付しとて花白く少し茎の下赤

一名。萩麦。烏麦。花麦。種さ  
七月花ハ八月刈り九月なり

俳 蓼の穂はまはさ花てりてす 芭蕉  
さるまのむねをたたる岡の松連三

蕎麥 河漏

河漏津と云ル  
ノ蕎麥ハ天下

第一ノ名物ナリ 因テ蕎麥ヲサ  
シテ文人墨客ハ河漏と云ナリ

蘆花

△芦の穂 一名 蓬蓼。  
又葭といひ葦といひ

大小よりての名ありとていふ  
種類ありとていふ花の風

あつて雪のてらり地よあ  
つまらていふ葉のおく

奇 秋風ふ吹きりたれに難波の  
あけ穂よりそふもけりる重之

俳 芦の穂はまはさ花てりてす 芭蕉  
さるまのむねをたたる岡の松連三

詩 芦花五字對句

同上

黄葉倒風雨

次 国幾千年

白花搖渚洲

漁村兩三家

詩 芦花七字對句

詩礎

一灘浩々花如雪

舞秋風

兩岸蕭々葉帶風

迷夜月

項羽草

花かんひのくく  
表紅裏黄く

能 馬の溝に秋の項羽草 待價

虞美人草

此花よくと季せ  
つ定めしきさや

今案此名出て口決りし付  
大和本草より名花譜及び園史

と別て四月花咲といふ今俗間  
美人草と云物之豊粟の變生の

物と見えたり一名美人豊粟と  
つう花彙類説本草時珍が

説各美人蕉とつういふことも  
決断せし然るも謡曲の項羽

の文より露州迄て秋草の葉毎  
は影やるといふ一部の趣意秋

美人草秋草と決せり今  
案の口決りこれらと以てつう身

べし謡曲の作意よりいへ本誌  
に於て美人草の名称として系

三百年に及ぶ依て是と據と  
せ秋小決しと可なりべし

龍膽

龍膽古今集  
龍膽三種の花

葉ともい皆其姿うつり野に多  
和名えぐと草和名抽 たつのは州

延喜式 草 草 草  
いり草能因集 やすいふか字鏡

古今集 物の名 友則  
我流の花をさくもくもくせん

能 草 草 草  
又ハるるささるる草

玄参

玄参 一名山  
ひさのうすつが

野芝麻 能消草 教品  
胡麻に似たり葉青くて



黄色と帯う花は此月枝毎  
小穂と生じ長と六七寸肥う

二尺ふらふ所ふらふて小異  
あり江戸の花はさきの一つ

まてん跡の白のごとく故  
いるの白つたの名あり

**木賊** 川千して物とさぐ故  
砥州と名はるく

哥 夫木 仲正

とくさるる芳れふふの木賊  
くがれつらつたの故乃月

本續川るしるは乃麻るる  
**第萱** △萱川 △萱背 △萱  
軒端の三秋の世二丁目出

**茜** 異名 加蘆 俳 子  
小澤も日 茜塚 富天

和名とひう草の牛  
**苦参** の舌痲の莖葉根と

ふふ茶用と守葉の根似く  
春生し冬凋む花は黄白根は黄

哥 市れはるるまき回のあふらるる  
林まのくもあふらるる外西行

**たやく** 千振とつる物とつら  
兼はるるまき花

桔梗に似る苗五六寸して二根  
莖生と然るも千振は秋白花あり

**薬堀** 此月茶草の根と堀  
べー根実して気つは

俳 茶堀先の供は目きく四水  
餅の柄と朱てやつあうふ

**石榴實** 一重ふれい実と結ぶ  
千重ふれい実あり

皮の内蜂の巢けく膜と以  
てこれと隔つ実へ赤く人の齒

のてく数甚と多し  
物数鬼子母神と祭ふこれと供

妙葉 咽のかりなまう  
まらの子多き瓜以てあらるべ

哥 續後拾遺 物の名

うれもころひきさるる終まじ

八月 草木 八十八 早

非 木よりあまのこが松極り金流

いふれい我ま付松極る會山

有とてい吟あつりり松極り山

秘珠切て吟いあつり松極り山

狂 一よりく隠みあつり松極り山

詩 柘榴亭對 同上

低垂圓玉紫 西域移根至

半壁碎珠紅 南方釀酒來

詩 柘榴詞 鄭解

高枝重欵折 霜老折丹膚

試剖紫金椀 滿堆紅玉珠

銀杏實 花ハ二月ありギンセン

鷹音入子と續甚後

霜と経て熟爛を食する物ハ此

仁あり。銀杏の仁二種あり三角の

物ハこれ雄木ハ二角の物ハ雌木ハ

非 右家ヤをまの松極りの実 青由

狂 秋木れハ葉ハ今の色ありて

実ハあつりも足ゆの松極り 貞室

苗香實 香木あつりぬれの面文全

通草 異名烏覆。葛覆。

孔通す故ハ通草といふ実を以

てこの月の季とす

蔓荔枝 異名 癩葡萄。錦

荔枝。蔓荔枝ハ葉葡萄ハ似

たり七月比黄花とひくく八月

瓜と結ふ二寸より五寸むわり

非 若瓜ハ血を吐き有とすは不二

狂 去青る若ハ魚ノヤ若瓜ハ

木瓜 (一名落鴉瓜) 地瓜。新

の枕の藪の中より多く生じて蔓

六月花あり栝蒔の花に似たり

長し秋冬熟して赤し栝蒔熱

頭の如しよく似たり又和俗い

名ありこれと炒り又醬油煮

非玉つるるのまのころ務丸千子

種瓢 (種) 實をむす物の野菜

の類の来春まく種でたぐいん

能又七月鼻のころ種をく

眉兒豆 (京大坂) 黄蘗

持渡りしころ江戸にて

菱取 (異名) 菱角。角あり

草菌 (草) 菌。かたけ

其の字ハ同一くびり内

ても笠をたりのとて岩

草類の惣名を和名抄

くさひの菜蔬とす按

其の字ハ同一くびり内

ても笠をたりのとて岩

茸草 木くさげの類あり。菌の字に並ある物として松菌と治推菌の類も。和名よきのこと。称するふ夫々の木の下に生じたり。子けじし心は推の木の下に推さじと生じ。根の下に根たけと生じたる類あり。

○菌の木菌あり。△土菌有。生じ。松の氣と以てその下は生じ人のよく知る。丸あり。○茯苓多き丸い草とくさる。西国より茯苓多し。

茸符 ちへて茸類と符といへり。先松茸と第一号。

○排。うへてひんそとさる。○菌。うへて蓮二。たきやくをやくのくさるの破衣夕。

初茸 秋山野の松樹有る。地は生じ毒あり。

石茸 ○石芝。表青く裏黒く。峯頭巖上とる。

だ嶮。所より生じ若くは採り人番にのりて大木ふらり。はりねるさして取る。とる。たごあやり。

鼠茸 (漢) 菴菴茸。朽木老樹の根より出づ。

針茸 鼠茸に似て。織は数十。

本並び生じ針の。鹿松。排。針茸やまも女のさる。鹿松。

覆茸 △滑。とる。排。から茸。や見合の供の補を。茸。

棕茸 棕の木に生じたる物。い。う。形。覆。とる。い。同。

平茸 (異) 天花茸。山林の湿地に生じ。

兔口茸 湿地に多く生じ。微。の表。褐色。端。とる。

てい。ち。ち。似。とる。滑。ら。ふ。と。孔。あり。略。蜂。の。巢。に。とる。

あり。略。蜂。の。巢。に。とる。

あり。略。蜂。の。巢。に。とる。



煮熟して人を照し影さした物  
○春夏蛇のふり物。此ふ皆  
人と殺さるよしく慎むべし  
○又塗物の上よりくねりぬる

**中稻** 八九月刈りかきしる中  
稻といふこしより早

○又早稻といふもの  
○曾丹葉 我々の中稻のこしは新瑞  
うらやみゆりく種をたぬるに  
非 かくそふ治らば中稻より貝之

**粟柜引** 五月七月の部ふも出  
る今両種ともい

晩種より柜引櫻黍の二種あり  
非 我々のこしはかく柜畑嵐登

**貝割菜** 菜の種土と切  
て漸く二三寸

二葉の形貝とよりなるか似たる  
故ふいふ大根蕪とも同時ス

**摘菜** △小菜の二葉長くと初て  
葉の形調ふとつとつと

**間引菜** 福菜の少し長いた  
るとつと種と多くつとつと

故長とつと時間と引ると故と名づく  
非 ところのつとつとの種とつとつと

つとつと菜やふの縁のつとつと 可大  
菜畑より分と入つとつとつと 冬花

在 ちつとつと菜の縁も菜も日と地を  
かくつとつとつとつとつとつと 隠士

**中後大根** やく長くと根の大き  
と筆油の如くつと

**菜種時** 是は蕪善の種類  
とつとつとつとつとつと

あつとつと 是と真菜といつと又油  
ふとつとつとつとつとつと

非 春と買ふつとつとの種もつとつと 菜花  
ちつとつとつとつとつとつと 飛鳥

**胡麻刈** (一名) 音囊の此月  
初の頃と八穂ある

胡麻と菜と種と法のとつとく  
しとつとつとつとつとつと 如く

八月 草木 種植 八ノ五十三

月の杯めしそくく、壽傘の  
くまをりさり

**種植** △芥子蔣 △大根

**蔣** △罌粟蔣 ○ワシ教  
不老といひて第一と守白芥を  
佳きり○大根亦数種あり○  
八月十五夜小種とまけの花実  
とも大ふよ○つととも八月種とま  
きり 三ツ國會ふ出さる

**非** けいさくは徳の路産せん 中申

字寮のいふう坊まや芥花 紹薫  
大根ふもまの乃いあひのた 清白

**生類** 此部ハ八月一ヶ月  
の生類をまのい

**燕歸** △燕いぬる○燕ハ春乃  
社日ハ來り秋の社日

小歸ると本州細目小見えさう二  
月の部ふ出せん爰小畧す○燕

とぞりり春さり本州小越燕  
胡燕の二種あり越燕ハ常の

燕さり胡燕ハ(和名)阿萬止里  
とつりりい俗深山燕とよ

哥 夫木 菓とこしてゆるとら燕  
まれさへ秋の風やくれしき

非 いぬ燕行傍の乳のきぬ眞  
はるる免後ふあをさつとん長水

方丈の建さるる去ぬつとら燕  
地いそいそをえほいそめ重可

在 燕の住るる家も秋の月れ  
強つりもひのかりをま 如來

**詩** 帰燕詞 崔道融

**海燕頻來去** 栖人獨滯留

ツバメハ海ノ上ヲ春ト秋トニタビクイタ  
リキタリスルニソノ燕ノスミカニナル我

ハイク年モコノ他國ニ 天邊又相送  
ナガトウリケスルコトヨ

**腸斷故園秋** コトシモカソツバメカ空  
トラクカヘルヲ見ニハ

ラハタノタユルホト故郷ノ  
秋ノケレキガコイレイトス

ラハタノタユルホト故郷ノ  
秋ノケレキガコイレイトス

ラハタノタユルホト故郷ノ  
秋ノケレキガコイレイトス

縮肩鳥

諸家の傳説多し

古今の三鳥の一は極秘され

尚三妻一を八道て補遺の出と

哥 夫木

家隆

秋の田の給おせをけり

木の葉りよむる家の障り

古今

忠岑

一書三鳥化用の哥とて

赤人

非 父母やをとおす

狂 何となくもいふ

鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒。聖姑

和名 △小いさこ

石たき

日本紀神代卷

二神始て夫婦の事

行ひのひたる時鶺鴒庭小来り

て首尾となくと見て

これなり其外異名も皆尾とた

くともいひてい

哥 夫木

寂蓮

狂 怨美の尾てた

給おへて居る

渡鳥

此月諸鳥

飛ぶ事

渡鳥

余月



して多し故ふ此月の景物と  
とてとり鳥と云へ等のこく

寒と恐まて地より渡り来る  
らりとのなまあす秋の草木

くもふ実とひまひ熱と故り  
是と求食としてひま飛ぶ中にも

異国より大洋と渡り来物多うは  
能かへんの首めさるや渡り来る芭蕉

一ひれ川へりたり渡り来る扇浦  
渡り来る雲ぬきそのみだれ芭蕉村

朝鳥渡 雁鴨をくのかさ  
ら守朝とく山の尾

と越えきくろとくし尾越の鴨と  
哥万葉あつふたと岩く松のうせ

たへるも坂も胡蝶として下畧  
能胡蝶とあ渡り小鳥の一目芭蕉

小鳥渡 秋の色々の小鳥渡り  
り口の渡鳥と山と

哥雲をたれをふ小鳥の渡りふ  
何れあるへの流のひまそ 実房

色鳥

是も色々のうつろき  
小鳥の渡りと云へ御傘出

鶉



鶉より小一全体黄  
色とて彼ひの色ひ

茶をくつろへ此鳥のつろくと  
こ一青と帯て頭脊黒色と

其声潔滑うてよく轉るる  
ヒユンチユンとつろがと種類河原

ひの唐ひの紅ひの蔓ひ  
哥山家集声せすいさくちりとは

なう柳のちえひひのひと  
能山次のほろ子も又鶉の老流

山雀

山陵鳥の形やどろ  
似て好んで胡桃と食ふ

能囀つと輪とらる瓢箪又いさ  
やとどかこの角置の杯とらとら

哥新帖ふくむ守りさるふくは  
おあつらふこのちりたり 光俊

能ふくふ後藝つとて司石素徳  
ふくふ月とて秋もくは 翠月

鶺鴒 △小陵鳥の山雀より似少き  
鶺鴒 △小く老うといふ此鳥

○平雀早雀同鳥より老てせと  
久少形のかううと五十雀と号す

日雀 △早雀に似て少く頭脊  
赤色頬のやう黒白

△トワの一書ハ鶺鴒とむと  
非 淵水砂の竜田川への日雀ハ水奴

猿子鳥 △三ヶ圖會  
ツる物又今

照様子 △藏器拾遺曰突厥雀  
そのかゝら雀のこと

頬赤鳥 △雀より小き頬赤  
くむひもろく声

畫眉鳥 △鶯より大き  
赤色眉白く赤く

高きしてわと  
非 三月ふ秋のほあれき砂 徒馬

片鈴とつひなりコロチリと  
かくと端鈴といふ深山やろ

我ひらり 林のちうとせし  
出家集 やういふと友とねんふまの

非 川よりの押やてける小雀ハ平秀  
ぬらうにまむ世のしとあ

四十雀 △五十雀  
小くく小似て  
大なり

○平雀早雀同鳥より老てせと  
久少形のかううと五十雀と号す

日雀 △早雀に似て少く頭脊  
赤色頬のやう黒白

△トワの一書ハ鶺鴒とむと  
非 淵水砂の竜田川への日雀ハ水奴

猿子鳥 △三ヶ圖會  
ツる物又今

照様子 △藏器拾遺曰突厥雀  
そのかゝら雀のこと

頬赤鳥 △雀より小き頬赤  
くむひもろく声

畫眉鳥 △鶯より大き  
赤色眉白く赤く

高きしてわと  
非 三月ふ秋のほあれき砂 徒馬

片鈴とつひなりコロチリと  
かくと端鈴といふ深山やろ

我ひらり 林のちうとせし  
出家集 やういふと友とねんふまの

非 川よりの押やてける小雀ハ平秀  
ぬらうにまむ世のしとあ

四十雀 △五十雀  
小くく小似て  
大なり

○平雀早雀同鳥より老てせと  
久少形のかううと五十雀と号す

日雀 △早雀に似て少く頭脊  
赤色頬のやう黒白

△トワの一書ハ鶺鴒とむと  
非 淵水砂の竜田川への日雀ハ水奴

猿子鳥 △三ヶ圖會  
ツる物又今

照様子 △藏器拾遺曰突厥雀  
そのかゝら雀のこと

頬赤鳥 △雀より小き頬赤  
くむひもろく声

畫眉鳥 △鶯より大き  
赤色眉白く赤く

高きしてわと  
非 三月ふ秋のほあれき砂 徒馬

片鈴とつひなりコロチリと  
かくと端鈴といふ深山やろ

わろふ似て啼きた毛冠と云

○**非** 乃其名記るの脊をを警ると信

**瑠璃鳥** 大さ雀のついでに翠  
雀小翠雀の二品あり

**眼白鳥** ○**非** 大雀の羽のつ  
わら白く 秀石

○**狂** 角力も小きほひとてふ  
志をいふ本をいふのいとする 東国

**鶉** ○**名** 鶉鶉。飛を多くい  
らる鶉。うり小く色蒼白く

頭上の毛起る好んで草木の実  
と食ふ○草木の種くへかた

物の其實と此鳥小食ふ糞  
の中より出る全と物とよりて

まけ極て生じぬこの鳥の性こ  
ざうして常の細くかたはさ

がして逆さ方小さなりさうりわの  
放ると待て飛ぶ是れ依て小

と瓜袋のほくしてさるなり是  
とひよりあまるといふ

○**秀** 夫木 こねらふこねらふ鶉を  
かきつてもさぬ色すこり那

○**非** ひさなる核の念まぬと嵐  
鶉のをやうさうて目松山連二

**鳥鶉** 近年異国より来り  
卵をうめて育つ

**鶉** ○魚狗 本神魚虎鳥 三代  
一名 碧衣 釣魚翁 水翠

○金鳥 水邊の静うらぬ  
ありて魚さうかひさる雀より

とこー大さる尾をかく口  
さう赤く大さる腹足赤し羽

碧緑ふして尤美麗なり  
○神代巻 日天稚彦殯の處小

鶉と以て御食人しはとつ  
是即魚と取ら故其役は

○**非** あとのむ末の指の憚らうも  
おなとらしかたの川せと公

○**非** 竊や彩 花小たるさ大  
川せとや三つと糸己うらけ 芭蕉

翡翠 マキノサギ 一名山翠。魚翠。鳴と同物。少大

連雀 ハシロ 山谷ふありて同じく魚さる。赤色帯て光あり。雀の大さあり。如



あり。鶏のこさふれごとく。赤色。あり。黄色あり。唐の雀あり。和名抄より出たり。

○漢名は練鵲。くつろの音を

同一。あぐまれとも別。のり。これを本朝まで尾長鳥と

いふ。ニヤ國會に出ふ出と。○連雀の胡虫の枝の乳より百鳥

尾長鳥 ハシロ 練鵲。一名三光鳥。澤名鳥。鳳。紺碧色

脊。少赤と帯。冠毛あり。目大。一七。臉青。其尾長。こと

一尺半余。群飛。声日月星と伝。○尾長鳥。鳥。鬼瓦。昌廣

狂 ウツク ヤ女小似。うろ尾。角鹿。縮。川。より。山の。と。そ。野。角。鹿

啄木鳥 ツクモリ 一名匠木。艸木。地。古里の尚品類あり

△て。は。き。○大小あり。小と小。大と大。ケラとケラ。小ハ毛羽黒白

相交。て。美。あり。雲雀の毛色。も。あり。足ハ黒く。前へ。二。後へ

二。つ。て。杜鵑の。と。又。大。さ。の。の。の。鳩。より。小。さ。して。惣。身。ふ

五色の彩色あり。て。ろ。り。頭。の。紅。さ。も。あり。是。と。山。さ。く。と

い。づ。き。も。啄。む。古。釘。の。如。し。む。と。木。と。つ。き。て。虫。と。喰

ふ。今。△。テ。ラ。キ。と。い。テ。ラ。を。ケ。ラ。の。轉。じ。る。ん。ケ。ラ。ハ。木。の。轉。じ

○夫木。あり。は。る。ま。の。植。え。う。つ。ま。て。あり。す。鳥。あり。て。う。つ。ま。り。か

○能。あ。つ。ま。を。謹。傳。つ。る。紅。の。彩。嵐。雲。ま。り。ひ。ん。み。柳。や。き。は。き。平。意





鳥あり故に世俗諸事翻語  
こゝにいさうとつへ又畧して  
すうともいひ又轉じてとつこ  
んとつふこれ又轉して江戸  
とつこをいさうといふ

① 狂石膏とつに附子そとつこ  
医勝といはれりうじくを 角鹿

初雁 八月初候ハ鳴ノ來ル  
礼記ハ見エテリ此ノ

早く來るノとつふなり哥にも  
初て來るハとつふなり九月ハ

初ノのこハとつふ有ハ  
元來ノ此項南ノ來ルノ

北ノ國ハ寒氣甚ク雪深ク  
餌ニ乏シ故南ノ國ハとつふ

② 室治百首 初ノ 信実  
夫ノ秋ノ小井玉つこのとつても  
今ノとつふとつふハとつふなり

千首 近初ノ 耕雲

守あゑうやのよみ小つゆ  
いさえにサつる初ノ乃身ノ

① 初ノの身ノ今朔望そむる。  
今夕とつふとつ路とつる

② 初ノヤハしそふまの茶山吉楓  
初ノヤハしそふまの茶山吉楓

雁 △ノ音 △ノ金 △ノ天津  
△ノ音 △ノ金 △ノ天津

③ 初ノつ △ノ玉章  
異名 雲侶 ○霜翰 ○蒼と野

鵝とつふ梵書ハ僧婆とつふ  
かひとつふ音なりと云説あり

てそいも詠ノ來る。又カ  
葉集ニかりりハ今ハとつふ

詠とつふとつてこれハノ名  
とつふ大抵四種の別あり

○真雁。白腹ハとつふ  
○白雁ハ

鶉 △野ノもハ 鶉  
性多激して佐鳥と交

鴻 菱食もかゝ。丁の天を  
るくつらう菱と云々のあり

變まうもどて鴻と同  
家産

夫木 くりうね  
久くはまきもれなきまかくれ  
まことそゆくする早國うさ

都小来うかりおね衣 妻之

松風やあゝへあゝらん丁のひの  
おとらとまきとほるる光

詞 そくおつらう。今そを井と  
うらうまきとつらうのそらふま

ぐる。まのうらうがひ。けさうらう。  
いとつらう。家産と。うけとま

驚うまけん。なごおつらう。あうそへ  
来る。松風の吹とをまか。松風を

丁のつらうとつらうのそらふ時行列  
丁の五章 けてまらるるうらうつら

の換哉う故事 丁の使  
の使はまらるる。丁の使はまらるる

涙 丁の涙。あそを丁のまらるる  
まらるる。あそを丁のまらるる

琴 丁の琴。あそを丁のまらるる  
まらるる。あそを丁のまらるる

衣 丁の衣。あそを丁のまらるる  
まらるる。あそを丁のまらるる

連 丁もあけあひあひの杖の声宗祇  
まらるる。あそを丁のまらるる

非 丁もあけあひあひの杖の声宗祇  
まらるる。あそを丁のまらるる

在 丁もあけあひあひの杖の声宗祇  
まらるる。あそを丁のまらるる

羽風小舟をちるるひは、常樂菴

詩 雁五字對句 同上

忽心聞涼雁至 下時波勢出

如報杜陵秋 起如陣形分

詩 全七字對句 詩礎

教声飄去和秋色 雁幾群

分言及上上思へみ秋色三三三

イタララカソ



一字横來背晚暉 暮天飛

詩 聞雁 玲瓏窓

虹影侵塔驟雨餘 声々新

雁渡雲衢

只恐燕山有帛唇

雁之 雁四德

故事 本神綱目云 寒

熱クナレハ南ヨリ北ヘカヘルハ信ナリ

飛ニ次第アリテ前ヨリ段々鳴ツ

ルハ礼ナリ 儼ラウレナフトキ余

ノ鳥ニ配セザルハ節ナリ 夜ム

レヤドリテ一羽ハソノアタリヲメ

グリテ守ル晝ハ芦ヲ啣テ矢

サキヲサクルハ智ナリ 己上ヲ雁

ノ四徳トスルナリ

雁書

漢ノ世ニ獲武胡國ヲ 征伐スル時大將トナリ

テ向ヒシニ軍破レテ匈奴ヲ 虜トナリテ歸ルヲ得ズ然レニ

匈奴イッリテ獲武ヲ死シタリト

云ヒ其後和睦トシテモ獲武

ヲ歸サズ漢ノ昭帝獲武カ死セ

ズシテ匈奴ニトラハレ居ルヲ知リ

テ使ヲツカハシテイハシムルハ帝

節テ射サシテ至フニ其雁ノ足

ニ獲武カ書ヲ結ビ付タレハ獲

武ハ未ダ存命居ルナラン歸ス

ベシト申サセ玉ヘハ匈奴大ニ驚キ

獲武ヲ歸セシトナリ 実ニ雁ニ文

ヲツケタルニアラズ漢ヨリハカ

リテ斯イハシメタルナリ

鷓鴣

昌瑑の説ハ春と 貞徳の説ハ秋

守渡ニ來ル時定ムル守

小鳥ノ日本ヘヨリテ秋

此鳥も秋とすり三月  
生類の部も委しくあり

**鶺鴒** △日雀もかく。形卑雀  
似て小雀。背赤色腹白

**鶺鴒** ○たぐ鳥。巧婦鳥。  
状黄雀に似たり

**鶺鴒** 大と兄鶺鴒のごとく首眼  
猫に似て又老う鬼に似

らる故木息し日本紀に見えり  
○本名取川等の物上品とす

**鮭** 正字鮭より。大年魚といふ  
状鱒に似て肥大より二三

尺四五尺細鱒あり。鮎と同じ  
春江海の間を生じて秋に至ると

河上ふ上る。秋の末は黒点と生  
て死とす。一年限のりの故よ

鮎と小年魚といふ。鮎と大年魚と  
いふ。奥羽の間より多し。衣川

武隅名取川等の物上品とす  
○水上天狗す。と鮎のちる。瀋山

○きのみたらきをいふ。衣川  
とせむ。あまらひてすけのりん

**鮎** 鮎の子より二胞あり。胞中  
数千粒とをさす。天と南天

の実は。又筋子。其子と云物あり  
○非はら子と松摺あり。天と南天

○狂。さう。ふら。さう。さう。いふ。狂。いふ  
その。叙。体。いふ。さう。狂。の。子。若。良

**加志加魚** △か。り。啼。説。を。説。く  
とて。未。た。り。き。ぬ

ハ。び。な。り。是。を。と。て。山。川。に。ま。り  
魚。の。○。ぎ。ぎ。○。や。ぶ。○。ご。ご。○。か

が。川。の。か。ま。つ。り。○。さ。さ。川。の。中。に  
ギ。と。さ。く。声。あり。鹿。に。比。し。て

カ。ト。さ。い。つ。ら。り。必。一。物。ふ。わ。り。す  
諸。々。方。言。も。有。り。又。一。種。春

季。と。す。り。カ。ト。の。魚。と。あ。り。べ  
む。り。井。手。の。蛙。と。い。ふ。物。あり

此。説。藤。堂。樂。庵。初。て。云。出。し。る  
あり。か。く。が。川。の。杜。夫。魚。と。い。ふ

まつらのかげ川よてつら知  
州よてこれと石かたつとつ

不分明なり

魚のつかり。状鮭不同。湖中  
生をり物名と異はて形少小也

江鮭 本州鮭。草魚。鱒。見えり。大和本州鮭

魚のつかり。状鮭不同。湖中  
生をり物名と異はて形少小也

白鮭のる井ややくれあはる。昌廣

狂とせまをまき。湖のあはる。瓜

ふりうのまき。瓜の。行理

大刀魚 形すく長く銀溜  
の光あり。大刀の白刃

小く似たり。故大刀魚といふ

非大刀魚。今も八条のうら。松殺

三ノ尺の大刀。後光る。おれ。萬折

狂。大刀魚と合して。これ。これ

大刀魚。今も八条のうら。松殺

やつとまいつて。おて。ま。あ。ろ。不。知。者

落鮎 正字 鱒 本草  
〇年 魚 和名抄

夫鮎。正二月の頃。江海の間。小  
生。次第。小河上。登る。石間の

瀑布。何程。水勢。分。り。た。り。も

凌。ぎ。て。の。ち。り。夏。の。頃。漸。肥。て

味。美。く。中。秋。尤。長。大。ゆ。て。大。な

及。小。此。時。草。間。小。子。と。生。し。て。後

漸。く。衰。小。故。は。流。ま。不。遊。る。と

あ。つ。り。守。水。不。隨。ひ。下。る。瓜。鮎

と。い。ふ。と。つ。り。此。後。全。射。ふ。黒。斑。の

魚。と。生。じ。こ。れ。と。さ。び。と。い。ふ

号。年。々。や。落。る。新。の。川。抄

下。梁。より。り。る。林。尾。そ。う。く。家。隆

非。さ。び。鮎。や。ち。か。ふ。と。電。る。分。て

魚。あ。ま。り。あ。ま。り。く。さ。け。た。り。重。魚

狂。た。つ。と。ま。い。つ。て。お。て。ま。あ。ろ。不。知。者

お。ら。の。末。の。あ。ま。り。お。ろ。ろ。一。回。長

下。梁 梁。の。真。と。つ。る。具。之。川。の  
両。岸。より。石。堰。中。と。一。丈

計明て水と下し其知竹の實と斜掛に置き水の簀と潜りて流し魚の水簀にさかひて簀の上へ躍り上る魚のり

崩梁 秋涼く魚の下の流りて魚梁も河水の流りて崩れ次第にしてさかひる

蛇穴入 俗は日春の彼岸ふ出て秋の彼岸ふ入と云月令ふ蟻虫坏戸と云り諸虫皆かくれし然るふ蛇の穴掘る其蟻とる時土を合んで穴に入春穴と出ると此土と吐く是石と化るとこれと蛇黄といふ

能く梁るうり方もまづり尚目おまるとるふ杖と杖まてさき

必用

此部小の八月一ヶ月の要用の事とあるす

破		軍		向		方	
夜五ツ	夜四ツ	夜七ツ	夜六ツ	朝五ツ	辰四ツ	巳三ツ	申二ツ
酉ノ方	戌ノ方	亥ノ方	子ノ方	丑ノ方	寅ノ方	卯ノ方	辰ノ方
夜五ツ	夜四ツ	夜七ツ	夜六ツ	朝五ツ	辰四ツ	巳三ツ	申二ツ
午ノ方	未ノ方	申ノ方	酉ノ方	戌ノ方	亥ノ方	子ノ方	丑ノ方

時刻 酉の日酉の刻申す申の刻事と身不用ゆき月建

出行作事 東北の方へ向ひぬくは今日天道

東北へゆく或い普請又の土とさるをどとるは東北の方とよとす

樂事 月の逍遥虫の夜遊のさしめとる暑さ消

草小玉らる曉の露木に白いとむるか人と夕暮のたの野

山の花錦とあきて籠庭の色

鳥のつとをあらうそいごとて興  
と催ふきつるこれ一

**占候** 此月外の日度の日ニラ  
あれハ米麥より虹あり

色の春ふつり米の價大貴  
秋分の後霜多々れ病あり

**天氣** 此日日和のちつこ早  
くして見さこめく月

あり暴風折々たるこあり  
海上慎むへり○雲ハ西より行

と日和と北より南へ行と雨  
とす○水まら雲ハ雨とす然

とも初め雲うらむて散  
とす水まら日和あり○赤

雲く川ハ災あり○紫の雲  
てハ大風く戌亥小雲あれハ風

生どろく此月陰氣さくふのが  
るふより極めて風も高くわたり

大風ふくことあり○西風と日和  
と南へよりて北へよりて

日和は○北風ハ雨あり夜分ハ吹ハ  
夜北からと稱して日和あり

**衣服** 帷子と着とふあり  
袴ハひの色とあり

時 **秋經書** 豎音緯 獲芳  
かり裏あり

**二藍** 紅花と青  
花と深る **蘭** 表裏

**葱衣** 表薄りへり裏青或ハ  
此草以てとるもす

**女衣服** 八月朔日より十五日まで  
ハかみゆりかみ○これ

さあの上やう○中 **薄** せや  
されのうんやう **薄** のこ

いすき **龍膽** かく川とふ  
白さひ又 同トミく又

もみらみとあり  
○八月十五日より九月八日までハ

綿つとめじの衣ありまじり  
うす色白く菊りもはり





○日本酒の種類いろいろあり  
出る時節ふより四季の内ふ出を

哥 万葉 ひろく 大伴旅人卿

酒は名残をいふはいづれへの  
ねむらひのこのよふりさ

秋ひるむといふも酒のこも  
ふとやちのふあやま 全

あまのいふまといふもいづれ  
いづれいふまといふもいづれ 全

所のあまのいふまといふもいづれ  
ねむらひのこのよふりさ 陰季

あまのいふまといふもいづれ  
いづれいふまといふもいづれ 俊頼

あまのいふまといふもいづれ  
いづれいふまといふもいづれ 長屋

あまのいふまといふもいづれ  
いづれいふまといふもいづれ 後京極

あまのいふまといふもいづれ  
いづれいふまといふもいづれ 天雄

あまのいふまといふもいづれ  
いづれいふまといふもいづれ 文全

狂 かきしる酒のちうらみあつの  
ねむらひもかきしる酒のちうらみあつの  
行安

酒のみこのそとくあり 貧道

詩 酒五字對句

色笑榴花重 光浮蘭葉翠

香兼竹葉醇 色猶鬱金黃

暁日着顔紅有暈 喧疎溜

春風入髓散無声 咽暗水

酒七字對句 詩 礎

酒之詞 林和靖

温如春色爽如秋一盞樽前

自獻酬 酒ヲソノハカラタケル



カチノハアキヌウチニヨツテヒトツクサカクシラ  
モツテタルノヘテヒトリサイタリオサハタリ  
シテ百万愁魔降不得故應

用爾作戈矛カズクノウレヘラ多イ  
モツテタルノヘテヒトリサイタリオサハタリ

碧香ナドニ云メシラクスル月ニモヨク  
寒キヲフセキ又シヨノビズニハ百ハイモ

大熱此中藏ヲタクシラヌク宮ニクク  
有ハカ至余モシタ多トウズルニヒヤ

酒樹 頭遜国ニ樹アリ石榴  
似タリ其花ノ汁ヲ採テ

瓶ノ中ニ停レハ数日ニシテ酒ト  
ナル味ハナハタ甘美ナリ

顧建康 顧憲之ト云人政ヲナ  
シテ甚人知ヲ得タリ

故ニ人々味アツク昔キ酒ヲ顧建  
康ト号ク其清クシテ且美ナルヲ云

### 八月飲食並料理献立

禁生姜八九月食ム宜ク  
物委トクハ九月の節あるを

○茄子秋の後多く食ム  
目と損トク○鳥羊小児宜ク食

好鬼肉今月より十月まで  
物食ムべし他月の宜しからず

料理汁 小豆 竹輪 かつお  
かぶ こんにゃく ほうとう

かぶ こんにゃく ほうとう  
おろし大根 ほうとう

清汁 小豆 竹輪 かつお  
かぶ こんにゃく ほうとう

膾 小豆 竹輪 かつお  
かぶ こんにゃく ほうとう

きすご 小豆 竹輪 かつお  
かぶ こんにゃく ほうとう

飛鳥 小豆 竹輪 かつお  
かぶ こんにゃく ほうとう





